

関西学院ゆかりの人々と中国

趙 怡

教授

(比較文学・比較文化)

関西学院の創始者ランバスは、アメリカ人宣教師の両親の赴任地上海で生まれ育ったことは周知の通りだが、校名と「KWANSEI GAKUIN」というやや珍しい読みは、彼によって決められた事実を知ったものは少ないだろう。池田信氏（経済学部元教授）の検証によると、総理ランバスが当時すでに公用語とされていた北京語のguanxiや日本において慣用的な「カンサイ」ではなく、「隋唐時代の主に長安地方の発音であり日本の漢音の原音でもあったクワンセイのほうを選んだことは、これこそが「関西」の古典的な音声であると判断したことによるものであろう」という。（池田信「「関西学院」の命名とその音声」『関西学院史紀要』第20号、2014年3月）

ランバス一家と中国についての詳細は、拙稿「ランバス一家と上海（1854－1921）に関する考査」、「上海と周辺地域におけるW・R・ランバスの活動」（学院リポジトリ掲載）に参考されたいが、ここで特に注目してほしいのは、親子の漢学の素養が高く、しかも標準語だけでなく、上海とその周辺地域の方言も習得したことである。現地で親しまれていた二人の中国名、父の「藍柏」（北京語Lanbai、上海語Leiba）と子の「藍華徳」（lanhuade/laihuode）からも、漢字の使い方のうまさが伺える。親子は高い言語能力を駆使して布教活動を行い、父ランバスは上海方言による雑誌も創刊した。筆者の調査で親子による漢文記事もいくつか発見できたが、いずれも大変流暢でレベルが高い。その努力の裏には、やはり深い中国理解があったに違いない。

さて関西学院の美しいキャンパスの設計者ヴォーリズも元々アメリカ人の宣教師であり、のちに日本人女性と結婚し、日本に帰化した者である（その日本名「米来留」（めれる）の意味は、アメリカから来て日本に残るという）。彼も1928年秋に中国に旅行したことがあり、その「鮮満北支那旅行記(一)(二)(完)」(『湖畔の声』第190-192号)からは新生の民国政府に対する期待と、北京の歴史と風景への賞賛、そして庶民への温かい眼差しが読み取れます。

実はヴォーリズの関係者には日中の架け橋になった人物が何人もいた。北京郊外の貧しい女子たちのために崇貞学園（東京・桜美林大学の前身）を設立し、「北京の聖者」と呼ばれていた清水安三は、ヴォーリズの教えを受け、近江ミSSIONの主要メンバーだった。清水の招きとメソジスト教会の任命により北京YMCA主事として赴任した池田鮮は、関西学院神学部予科で学んだこともあり、かつて北京YMCAを創設したランバスの跡を継いだともいえる。池田は北京の後に終戦まで上海YMCA総主事を務めたが、そのメンバーには内山完造と塚本助太郎がいた。長年上

海に在住し、魯迅、田漢、郭沫若などの中国の著名な文化人とも交友し、日中文化交流の中心人物として歴史に名を残したが、それぞれヴォーリスと、その友人である同志社の牧野虎次の教えによりクリスチャンになった（塚本はのちに牧野の娘と結婚）。二人は共に日本の侵略戦争に反対する立場を取り、戦時下でも中国の人々を応援していた。もちろん中国語にも精通していた。彼らに招かれて牧野が上海に旅したこともある。

最後に取り上げたいのは校歌「空の翼」の作曲者、山田耕筰である。著名な詩人北原白秋は歌詞に漢語、和語、ひらがな、カタカナ、さらには英語まで混ぜ合わせ、世にも珍しい、かつ美しい作品を作り上げた。対して関西学院のOBだった山田は中国でも知られていた国際派の音楽家であり、1942年、当時東洋一と呼ばれていた著名な上海交響楽団と共演した。上海を占領した日本側の文化工作の一環だったが、日本の伝統音楽と西洋近代音楽を融合させた山田耕筰の試みが、現地の高名なフランス人音楽評論家にも高く評価されたのである。

関西学院はミッション系でありながら、不思議と中国との縁が深い。最後にランバス先生の言葉をあげて今日の話を終わせたい：「隣人という意識は、人々の居住するあらゆる地域の間ですでに存在している。距離は消失つつある。兄弟という意識が、隣人という意識の後に続いていかなければならない。しかし兄弟という意識は、隣人という意識の中にキリストの精神が感じられるようにならなければ、広がらない。（中略）それに兄弟という意識がなければ、隣人らしさのない隣人関係となって、摩擦や抗争が増大することだろう。」（ランバス『医療宣教』191頁）